01

アジアからの学生・研究者を招き 東京医科歯科大学の魅力をアピール

第2回「国際サマープログラム」が2010年9月5日(日)からの4日間で開催された。2009年から始まった同プログラムは、海外からの優秀な留学生を確保するのが目的だ。今回の参加応募者はアジア16の国と地域から96人。選考に基づき計14の国と地域から26人(ガーナ・野口記念医学研究所からの2人を含む)を招聘した。

プログラムの主な内容は、基礎から最先端までの講義とシンポジウム、キャンパスツアー、交流会など。今回は「感染と免疫」をテーマに本学関連分野の教授に加えて、James W Kazura(米国)博士およびNawarat W Charoen(タイ)博士を迎えて講義が実施され、活発な質疑が繰り広げられた。また、新たな試みとして少人数でのグループ・ディスカッション、参加者が個別に行う研究室訪問を実施。同プログラムの座長を務めた東みゆき教授はその意図を語る。

「受動的になりがちなレクチャーに対して、グループ・ディスカッションでは参加者自らが発言できます。講師の先生や、本学の留学生たちも親身になって参加者と語り合ってくれました。主催者として私たちも海外の若手研究者や学生のニーズを直接聞く良い機会になったと思っています」

参加者アンケートでも、「グループ・ディスカッションや研究室訪問にもっと時間を割いてほしかった」という意見が多かったという。来年度以降は、プログラム期間中に入学審査なども実施できるよう検討している。

「参加者がすぐ次の年から留学を決めるとは限りません。しかし、継続してこのプログラムを行うことで、本学の認知度は、海外でも上がってくるはず。将来のためにも、さらに充実した内容にしていきたいと考えています」

東 みゆき教授
大学院医歯学総合研究科
分子免疫学分野
2010年度国際サマープログラム 座長

参加者国名

アジア14の国と地域から26人が参加
アフガニスタン、インド、インドネシア、カンボジア、台湾、パキスタン、スリランカ、タイ、タジキスタン、中国、ネパール、バングラデシュ、フィリピン、ベトナム、マレーシア、ミャンマー、ガーナ(特別枠・野口記念医学研究所)

プログラム概要

1日目(9月5日)
17:00～17:30　レジストレーション
17:30～18:00　オリエンテーション
18:00～20:00　歓迎レセプション

2日目(9月6日)
9:30～12:00　レクチャー・コース 1
①烏山一教授
②James W.Kazura博士
(米国　ケースウエスタンリザーブ大学)
③太田伸生教授
13:00～14:30　グループ・ディスカッション
15:00～15:30　東京医科歯科大学の紹介
15:30～17:00　キャンパスツアー
17:00～19:00　ポスターセッション

3日目(9月7日)
9:00～12:15　レクチャー・コース 2
①小川佳宏教授
②Nawarat Wara-aswapati Charoen博士
(タイ コンケン大学)
③山岡昇司教授
④東みゆき教授
12:15～17:00　オプション・プログラム
18:00～20:00　修了証授与式・交流会

4日目(9月8日)
9:10～17:00　ISPシンポジウム2010＆駿河台国際シンポジウム

02

6号館横の清掃活動を行う大山学長(左)と谷本理事(右)

梅の木を植樹する大山学長

2010年10月12日(火)の創立記念日に、「M&Dタワー開設記念式典」や「第1回ホームカミングデイ」など様々な行事を開催しました。
「マイキャンパスプロジェクト」として、学生教職員に呼びかけ、大学構内と周辺道路の清掃を行い、
「癒しの緑プロジェクト」として、大学のシンボルでもある紅白の梅と蝋梅を植樹しました。
「M&Dタワー開設式典」では、学長挨拶の後、辰野文部科学省大臣官房文教施設企画部長、成澤文京区長及び羽入お茶の水女子大学長により祝辞がありました。
「やる気倍増プロジェクト」として、医学部・歯学部附属病院における顕著な活動を対象に表彰しました。
「第1回ホームカミングデイ」では、M&Dタワー2階大講堂において、出井伸之氏(クオンタムリープ株式会社代表取締役)を招いての講演が行われたほか、キャンパスツアーが実施されました。

医学部医事課栄養管理室を表彰

歯科衛生保健部を表彰

外から見た東京医科歯科大学と本学に期待すること

講演者　出井伸之氏
クオンタムリープ株式会社 代表取締役 ファウンダー&CEO
本学経営協議会学外委員
ソニー株式会社 アドバイザリーボード議長

世界各国の内科医の数を見ると、中国が最も多いという統計があります。中国の人口は、日本の10倍です。中国医学の西欧化のスピードは非常に早く、大手製薬企業の投資も中国が中心になるでしょう。インドでもジェネリック医薬品を製造する企業が急速に発展しています。

中国を中心としたアジア諸国に対して、日本の果たす役割は非常に重要になってくると思います。なぜかというと、アジアで一番大きな問題は、貧困の問題だからです。水、エネルギー、医療などのインフラが十分に整備されていない環境での生活を余儀なくされている人々が、日本の人口の約2倍はいます。この問題に対処するのは、一国だけでなく、アジア地域の各国において産官学が協力する必要があります。

東京医科歯科大学は、タイのチュラロンコン大学など、アジア地域とも国際交流を進めています。今後さらに国内外との交流をはかり、アジア地域の問題について一歩一歩進めていくべきだと思っています。

特に教育において果たす役割は大きいのではないでしょうか。中国からの留学生を日本に受け入れ、さらに日本から世界へ送り出していく。これは、教育機関としての東京医科歯科大学にできる重要なことの1つといえます。ITやエレクトロニクスによる医療技術の発展も、今後さらに進んでいくでしょう。

2030年に向けて、東京医科歯科大学の取り組むべきことは、現在の計画の延長線上と、これから新たに手掛けられる計画の2つがあると思います。エレクトロニクス産業、自動車産業が、グローバル化の中で大きく変わりつつあるように、医療業界も変化していくでしょう。製薬業界が変化し、診察の方法なども急速に変わっています。

例えば、製薬企業には、MR(メディカル・レプレゼンタティブ)という医療情報担当者の人たちがいます。彼らは、医師や薬剤師などの医療従事者に、医薬品の有効性、安全性などについて情報を提供しています。これらをつなぐインターネットのサービス「m3.com」を提供するエムスリー株式会社は上場し成功しています。

これは、もともとソニーの産業医が考案したビジネスモデルで、医療機関と自社とを結び付けるコミュニティがあれば、ビジネスとして成立するのではないかと考えたことから始まりました。

東京医科歯科大学では、附属病院の様々なデータがオンラインでつながっている素晴らしい環境が整っています。しかし、それは学内のみで、学外にはつながっていない。このシステムが大学にかかわる人たちのコミュニティをつなぐとすれば、すぐにでも何らかの新しいサービスを実施できるのではないかと思います。

このように考えると、医療にかかわる新たなサービスは、第三者ではなく、東京医科歯科大学自身が取り組むべきだと思います。10年後のホームカミングデイは、きっと新たな東京医科歯科大学の取り組みが成果として表れていることでしょう。

03

東京医科歯科大学の3つの暗礁とそれを乗越えた先輩たちの刻苦奮励

大山喬史
東京医科歯科大学学長

本学は昭和3年10月12日に発足した東京高等歯科医学校を母体とし、今年で82周年を迎えました。本学がこれまでに遭遇した3つの暗礁と先輩方の刻苦奮励を振り返ってみたいと思います。

一．東京高等歯科医学校初代校長、島峯徹先生、引き継がれました長尾優先生には、本学設立に当たって、実は大変なご苦労がありました。ことに長尾先生は島峯先生の8年後輩で、東京帝国大学医科大学を大正2年にご卒業になられ、先生ご自身は外科学で身を立てられるお積りでした。しかし、故あって、ご両親の反対を押し切って東京帝国大学・医科大学歯科学教室に身を置かれました。しかし、そこでは“歯科医学とは何か”と相当な激論が交わされたようです。そんな折、大正3年12月、7年ぶりに外国留学から帰国されました島峯先生に出会うことになり、そこから島峯先生、長尾先生らの官立の歯科医学教育機関設立に向けての刻苦奮励が始まりました。

当時の周囲の意見は、官立で歯学部を立ち上げるなら東京帝国大学内にすべきということでした。しかし、お二人が描く理想像、歯学教育の実現は、反って当時の東京帝国大学では無理であるという判断、その確信から、あくまでも別立てでなければならないという堅忍不抜の立場を貫き通しました。それは並大抵のことではなかったものと思います。島峯先生は、東京帝国大学医学部歯科学教室の講師を併任しつつ、大正6年歯科医師開業試験・附属病院長に着任しました。歯科高等教育機関を設立することに奔走し、政界官界学界に知己交友も多かったこととその方々の支援もあって、大正12年、苦心惨憺の末、やっと創設案が議会を通過しました。

ところが、またまた思いもかけない暗礁に出会うことになりました。同年9月1日関東大震災に見舞われ、執行が遅れてしまったのです。それから5年経って、ようやく無事に東京高等歯科医学校設立の官制が交付されるにいたりました。その日が本学の創立記念日、昭和3年10月12日というわけです。

昭和4年4月20日には、第一回生100人を迎え、目出度く入学宣誓式が挙行されました。当時の歯科大学としては、世界でも例がない基礎医学講座の充実を図ったところは、特筆すべきものでした。それは本学の今日の発展に繋がり、また後にできた国立大学歯学部にも大きな影響を与えることになりました。

そして、昭和19年に、東京医学歯学専門学校と校名を改め、歯学科(定員80名)に医学科(定員80名)を併設することになりました。

二．専門学校から旧制大学への昇格にあたって、改めて校名が検討されました。「東京医歯科大学」「御茶水医歯科大学」「東京医学歯学大學」などの案も検討され、最終的には「東京医科歯科大学」に落ち着き、昭和21年、大学(旧制)への昇格に漕ぎ着き、歯学部も医学部と同様に予科教育2年・専門教育4年となりました。

実は、ここでも更なる暗礁にぶつかることになりました。それは、GHQの歯学科教育制度改革担当者であるリヂレー中佐は、医学教育から手を引き、歯科大学単独で存続するか、東京大学に入って総合大学の歯学科として再度スタートしてはどうかと提唱してきました。まさに本学の存続にかかわる決断が迫られたのです。しかし、そうした議論の背後では、長尾先生は先生で、医学科・歯学科の予科の設置場所探し、施設整備を着々と進めており、長尾先生の粘り強い交渉、先生曰く「常に懐に辞表を抱えて」のこころ鉄石の如しと、奮迅の努力をなされておりました。最終的には、何とか理解が得られ、従来通り歯学部、医学部の両学部を抱えた東京医科歯科大学(旧制)として存続できることになり、昭和26年に、今日の東京医科歯科大学(新制)に昇格しました。

三．昭和53年には、「東京医科歯科大学・調布村に移転決定」と朝日新聞の一面に大見出しで報道され、本学も大変混乱いたしました。湯島地区は勿論、駿河台地区、国府台地区すべてを売り払うという条件付きの移転計画であり、移転先の調布市(当時の調布村)も受け入れを歓迎しておりました。明日にでも移転かと大変不安で大きな暗礁でしたが、本学臨床系の猛反発から学内の賛同は得られず、狭隘ながらも湯島地区での再開発という道を選択することになりました。都心の一等地に、こうして残り得たのは大正解といえる選択だったと思います。

読者の皆様は、「そんなことがあったの!」と思われる方が多いかと思いますが、本学にも苦難な道がありました。先輩方は、時々の難問に直面しつつも、本学の理想像の実現に向けて、不撓不屈の努力を重ねてこられました。先輩諸氏の不抜の気概あっての今日と、心より敬意と感謝の意を表し、そして、引き継いだ私たちの責任の重さと、果たさなければならない義務の大きさを改めて反芻しなければならないと思います。

04

鈴木章夫前学長が逝去

本学前学長である、鈴木章夫名誉教授が、2010年10月28日に急性虚血性心疾患のため、80歳で逝去されました。

鈴木先生は、1956年に本学医学部医学科を卒業し、東京米国陸軍病院において1年間の実地修練の後、17年余の間、米国にてクリーブランド市セント・ヴィンセント・チャリティー病院レジデント、同病院心臓血管外科主任研究員、ミシシッピー大学医学部外科準教授、同大学附属病院心臓血管外科部長などを歴任しています。セント・ヴィンセント・チャリティー病院では、心臓外科のE. B. Kay博士と共同研究を行われました。1974年に順天堂大学に招聘され、1983年から本学医学部胸部外科学講座初代教授として、教育、研究、診療に従事されました。さらに1995年には、本学学長に就任し、大学の発展のため邁進・尽力されました。

鈴木先生は、心臓外科学の創世期から現在まで、新しい術式、治療法を開発するなど多大な貢献をされました。特に「後天性心疾患の外科治療の開発と確立」という観点から、日本医師会医学賞を1996年に受賞されています。翌1997年には、紫綬褒章を受章し、さらに2007年に文化功労者として顕彰されました。そして2010年10月に、国家および公共的な業務に長年従事し、功労を積み成績を挙げた者として瑞宝重光章を受章、正四位を叙位されました。

研究業績として、「心臓人工弁の研究開発および手術中の心筋保護法の開発」では、弁膜症など極度に破壊された心臓弁疾患に対して、テフロン・ファブリックからなる手作りの人工大動脈弁により大動脈弁置換に成功し(1960年5月4日)、初めて人工弁が人類の心臓の中で生理的に機能することを証明されました。その後完成させた“Kay-SuzukiのDisk型”人工弁は、現在に至る人工弁の基礎となっています。「心筋梗塞、狭心症等の虚血性心疾患に対する外科治療の開発と普及」では、現在では一般化している内胸動脈を使用した血行再建、内胸動脈と大伏在静脈を併用した血行再建術など、虚血性心疾患に対する外科治療を開発されました。現在、鈴木先生の提唱した手術は世界で年間65万例から85万例が行われており、約80万人の生命が救われているといわれています。

教育面でも多大な功績を残されています。本学医学部附属病院長また医学部長時代には、6年制一貫教育の新カリキュラムを作成、医学研究科生体感染制御医科学系独立専攻系、大学院医歯学総合研究科および大学院医学系研究科保健衛生学専攻博士課程の設置などでその中心的役割を果たされました。

国立大学法人への移行の際には、国立大学協会において、第6常置委員会(財政)、設置形態検討特別委員会財務会計専門委員会に属し、ご活躍されました。国立大学全体の代表として、卓越した手腕をもって、適正な財務制度の構築に多大なる貢献をしており、その功績は特筆すべきものがあります。ここに謹んで鈴木先生に哀悼の意を表し、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

鈴木前学長は、大学の教育研究の広報活動にも注力され、2002年の『Bloom!』創刊も手掛けられました。

2010年12月18日に本学で行われたお別れの会で追悼の辞を述べる大山学長。

渡海文部科学大臣(右)から顕彰状等を受ける鈴木先生(左)於：ホテルオークラ。写真：(株)文教ニュース社「週刊文教ニュース第1958号」より転載。

鈴木章夫前学長の主な経歴

1956年3月	東京医科歯科大学 医学部医学科卒業
1957年4月	東京米国陸軍病院インターン
1957年7月	米国ニューヨーク州 アルバニー医科大学外科準レジデント
1958年7月	米国オハイオ州クリーブランド市 セントヴィンセントチャリティー病院 レジデント
1963年7月	同病院心臓血管外科主任研究員
1968年4月	米国ミシシッピー大学 医学部一般外科兼務チーフレジデント
1971年5月	同大学医学部外科准教授 附属病院心臓血管外科部長
1974年9月	順天堂大学医学部教授
1983年2月	東京医科歯科大学医学部教授
1987年7月	東京医科歯科大学医学部附属病院長
1992年8月	東京医科歯科大学医学部長
1995年4月	東京医科歯科大学名誉教授
1995年8月	東京医科歯科大学学長

受賞等

1996年11月	日本医師会医学賞
1997年11月	紫綬褒章
2007年11月	文化功労者
2010年10月	瑞宝重光章、正四位

05

本学における高大連携 連続した中等・高等教育とアウトリーチ活動

森尾友宏准教授
大学院医歯学総合研究科
発生発達病態学分野
学長特別補佐

本学では、高大連携を中期目標・中期計画の1つとして掲げ、2009年から活動を開始しています。

県立千葉高校では、2010年6月25日に、国際環境寄生虫病学分野の太田伸生教授が出張講義を実施、高校1年生を対象に魚を題材にした実習を行いました。また8月2日には同校の1年生15人が本学を訪問し、各研究室(医学科2、歯学科2、難治疾患研究所2)で実験や見学、研究発表会を行いました。

2010年6月に県立千葉高校で行われた出張講義。

都立日比谷高校はスーパーサイエンスハイスクール指定校で、野田政樹難治疾患研究所前所長の時代から研究室見学を行ってきました。2009年からは医学科、歯学科も加わり、正式な高大連携に発展しました。2010年は、7月14日に3年生20人、7月15日に1、2年生20人が本学を訪問し、研究室に配属されています。難治疾患研究所15教室、医学科・歯学科それぞれ1教室が対応し、3時間程度にわたって教授との会話、実験室説明、研究説明などが行われました。

理科科目の中で、生物は最も進歩の目覚しい分野です。高校の生物の教諭は「生徒に十分な現代的知識を伝えられていない」との焦りと危機感を持っているようです。例えば、高校の指導要綱にはエピジェネティクスについての記載がありません。教諭・生徒に対して生命科学の面白さを伝達するためにも、高大連携は重要な活動だといえるでしょう。

活動後のアンケート調査では、67%から「とても有意義だった」、31%から「有意義だった」との評価を受けました。両校とも他大学との高大連携を実施していますが、本学が一番人気と好評を得ています。参加した学生の多くは、進路として、医学、歯学、検査、看護、薬学などに興味があるようです。本学での高大連携はオープンキャンパスとともに、重要なアウトリーチ活動の1つとして定着しつつあります。

Topics 2010年7月～12月の主な出来事

7月
- 1 新図書館プレオープン
- 2 事務職員採用説明会
- 27 ✤プレスリリース「病原体の運び屋である吸血ダニに対する生体防御の仕組みを解明」烏山一 教授
- 28 ❣内容は本誌 p12-13を参照 全学オープンキャンパス(～29日)
- 31 海外研修奨励金贈呈式
- 教養部「夏の公開講座」開始

8月
- 24 歯学部オープンキャンパス

9月
- 1 口腔保健学科3年次編入学試験
- 6 International Summer Program 2010: Infection and Immunity(～8日)
- 8 第25回大学院セミナー
- 21 学位記授与式
- 24 口腔保健学科3年次編入学試験最終合格発表
- 28 大学院保健衛生学研究科後期入学試験
- 29 教員研修会
- 29 【医歯学融合教育カリキュラム策定進捗状況の報告】
- ❣内容は本誌 p4-9を参照 大学院医歯学総合研究科博士課程前期試験

10月
- 1 新図書館オープン
- 6 大学公開講座「健康を考える－がんの予防と治療－」開始
- 12 創立記念日大学行事(マイキャンパスプロジェクト・癒しの緑づくりプロジェクト、M&Dタワー開設記念式典、第一回ホームカミングデイ・やる気倍増プロジェクト表彰式、キャンパスツアー、永年勤続者表彰式)
- ❣内容は本誌 p20を参照 お茶の水祭(～17日)
- 16 解剖体追悼式 於：築地本願寺
- 21 大学院保健衛生学研究科(後期課程)試験合格発表
- 22 第11回体験型公開講座「健康維持は知ることから：健康チェック」(～24日)
- 23 大学院医歯学総合研究科(博士課程)試験合格発表

11月
- 15 第26回大学院セミナー(15、19、22、26日)

12月
- 18 故鈴木章夫前学長 お別れの会
- ❣内容は本誌 p22を参照

図書館ロビー(M&Dタワー3階)

創立記念日行事

解剖体追悼式